

氏 名	宮崎 太樹
学 位 の 種 類	博士(英語学)
学 位 記 番 号	甲第19号
学位授与年月日	2024年9月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当(課程博士)
学位論文題目	疑問文を作るパターンプラクティスが即興的なやり取りに与える影響
論文審査委員	委員 教授 柳 善和 委員 教授 城 哲哉 外部審査委員 深澤 清治 外部審査委員 築道 和明

論文の概要

宮崎太樹氏による本論文は、「疑問文を作るパターンプラクティスが即興的なやり取りに与える影響」と題して、日本の中学校英語教育において、「即興的なやり取り」がより頻繁に使用できるようになるために疑問文を作るパターンプラクティスがどのような影響を与えるかを検討することを目的としたものである。このことから、「即興的なやり取り」である「1分間チャット」を効果的に行うためには、教科書本文から疑問文を作る「転換」作業、そして「管理された作業」を継続的に行うことが有用だと考え、本研究を進めることとした。

本研究においては、分析には複雑さとして疑問文の数と1文付加した回数、正確さとして、誤りのない文の数、流暢さとして1分間あたりの実発話語数を使用する。これらに加え、定型表現よりも幅広い内容を話せているかを検証した。そのために発話された疑問文のうち、事前に学習した「生徒同士によるQ&A」(本多 2009)に使用されている疑問文の割合を、定型表現の指標として、定型表現の割合が低下するほど、幅広い内容で話せていると見なすこととした。また、最後に相手の発話をもとに、一貫した話題で自然にやり取りを進めることができているかを検証した。そのため、会話の内容を分析し、話題の推移の回数が低下するほど、一貫した話題で自然にやり取りを進めることができていると見なすこととした。

以上を踏まえ、**Research Questions** として次の5つを設定している。

- ① 疑問文を作るパターンプラクティスは、即興的なやり取りにおいて複雑性を高めるか。
- ② 疑問文を作るパターンプラクティスは、即興的なやり取りにおいて正確性を高めるか。
- ③ 疑問文を作るパターンプラクティスは、即興的なやり取りにおいて流暢性を高めるか。
- ④ 疑問文を作るパターンプラクティスは、即興的なやり取りにおいて定型表現の使用率を下げるか。

- ⑤ 疑問文を作るパターンプラクティスは、即興的なやり取りにおいて話題の推移の回数を下げるか。

研究方法

以上の **Research Questions** について、宮崎氏は協力者として東京都の公立中学校 6 学級の生徒 231 名に依頼し、2021 年 9 月に帯活動として実施した「生徒による Q&A」(本多 2009) で練習した 36 の質問文のうち、3 文を選び、それぞれ 3 回ずつ、全部で 9 回実施した。続いて、「1 分間チャット」**Pre-test** を 2022 年 3 月に実施した。通常の授業の時間の中で、復習問題のワークシートを自主学習しながら、教室の後方に移動し受験した。授業内の帯活動の「1 分間チャット」で出題しなかった、「生徒による Q&A」の疑問文 33 文の中から、帯活動の「1 分間チャット」で出題した疑問文と同じような内容になると予測される 3 問を出題した。このテストでは、各ペアが試験監督である宮崎氏が 3 枚のカードからランダムに引いた 1 枚に書いてある疑問文から 1 分間会話をした。テストの内容は全て録画され、その音声データは宮崎氏によって文字起こされた。2022 年 4 月より奇数学級のみ、英語の授業の最後の 5 分間に教科書本文から疑問文を作るパターンプラクティスを全 12 回実施した。2022 年 6 月 13 日に「1 分間チャット」**Post-Test** を実施した。**Pre-Test** と同様の手順で行われ、分析が行われた。

研究結果及び考察

ここでは **Pre-Test** と **Post-Test** における実験結果を示す。**Pre-Test** と **Post-Test** の両方を受験したのは、実験群が 72 名、統制群が 64 名であった。これらの生徒のみの結果を活用する。

Research Question①について、疑問文の数と応答文に 1 文付加した回数に関して、実験群と統制群の間に差は見られなかった。

Research Question②について、**Pre-Test** の前に生徒は生徒同士による Q&A で疑問文と応答文の言語形式を意識した練習を複数回行い、その後 1 分間チャットで言語内容を意識した練習を複数回行い、その後 1 分間チャットで言語内容を意識した練習を複数回行った。この時点では生徒の意識は言語形式から離れている。しかし、実験群だけは疑問文を作るパターンプラクティスを行うことで、もう一度言語形式を意識した練習を複数回行った。言語内容に焦点をあてた活動の後に、言語形式に焦点をあてた活動を行ったので、**focus on form** に類似した効果が現れたと考えることができる。

Research Question③については、「即興的なやり取り」は疑問文とその応答文、そして応答に関連する文が付加される、もしくは付加されずに次の疑問文が発話されることが繰り返される。つまり、疑問文と応答文を多く発話することになる。疑問文を作るパターンプラクティスを複数回にわたり実施することで、疑問文と応答文を、モデルの復唱だけではなく、生徒が自分で考えて疑問文を発話し、そして対応する応答文を発話するという練習を反復するため、「知識の自動化」につながり、流暢性の向上に貢献し

ていると考えられる。

また、**Research Question①～③**の指標をまとめて分析すると、統制群が「即興的なやり取り」を行う際に、複雑性に注目した結果、トレードオフが起こり、正確性と流暢性が下がってしまったが、実験群は **Pre-Test** の後に複数回、疑問文を作るパターンプラクティスを実施した結果、トレードオフが起こらず、流暢性、複雑性、正確性の全てを向上させることができたと考えられる。

Research Question④について、実験群は疑問文を作るパターンプラクティスを複数回行うことで、様々な形式の疑問文を発話する練習を行い、疑問文の第二言語知識を自動化することで、**Post-Test** の中でも同様に発話をするのできる疑問文の種類が増えた。その結果、**Pre-Test** では、疑問文を発する能力が低かったため、既習の定型表現に頼っていたが、実験群では **Post-Test** で生徒自身が発話したい疑問文を発話する割合が増えたと考えることができる。

Research Question⑤では、実験群は疑問文を作るパターンプラクティスを複数回行うことで、様々な形式の疑問文を発話する練習を行うことができる。また、疑問文の言語知識を自動化することで、**Post-Test** の中では発話の形式よりも発話の内容に焦点を当てることができる。相手が発話する内容にも焦点を当てて適切に応答することができたため、一貫性のある発話ができるようになり、「積極的聴取者」として、話題を不自然に推移させる必要がなかったためと考えることができる。

結論と今後の課題

本研究では、日本の公立中学校の英語授業において、生徒が「即興的なやり取り」である「1分間チャット」において、複雑性、正確性、流暢性を高めるために、また定型表現よりも幅広い内容で発話し、一貫した話題で会話をするのに必要な練習として、疑問文を作るパターンプラクティスがどのように影響するか、研究を行った。疑問文を作るパターンプラクティスを帯活動として12回行った実験群の方が、行わなかった統制群と比べて、正確性の指標である正確な文の割合、流暢性の指標である語数が向上し、定型表現の使用率と話題の推移の回数が低下した。一方、複雑性に関しては差が見られなかった。

今後の課題として、以下の3点が挙げられる。

第1に、本研究では、教科書本文から疑問文を作るパターンプラクティスを行ったが、実際に「1分間チャット」で発話することが想定される疑問文を練習しているわけではない。実際に生徒が発話することが想定される疑問文を練習するような工夫をすることで、生徒は「1分間チャット」の中でより自由に発話することができるようになると思われる。

第2に、本研究では帯活動として疑問文を作るパターンプラクティスを行ったが、本来は教科書本文の復習の活動の一環として行われるべきである。現代の英語授業の指導手順にそのまま加えることは難しいが、工夫をすること組み込み、より効率的に実施す

ることが望まれる。

第3に、本研究では生徒が疑問文を作るパターンプラクティスや「1分間チャット」について、難易度や有用性を調査する質問紙調査を実施できなかった。今後の研究の中でこのようなデータも収集できるよう工夫できる必要があると考えられる。

論文の評価

本論文は、日本人中学生の英語学習者を対象に、疑問文を生成しその応答への英語表現が自動化されるように、教室内でパターンプラクティスの活動を一定期間取り入れ、その成果を学習者の即興的な発話内容の分析を通して、明らかにしようとした試みである。パターンプラクティスは、1960年代で日本では一般的に取り入れられたが、その機械的な学習に対しての批判が生じ、後の **Communicative Approach** に取って代わられた。教授法や指導技術には盛衰がつきものではあるが、日本の場合、海外からの研究動向に強く影響を受け、批判的な傾向が生まれてくると過去の教授法を排除してきたという流れがある。そうしたマクロな英語教育の歴史の中で、**Oral Approach** でのパターンプラクティスを即興的なやり取りの力を養成するために活用しようとした本研究は、評価に値する。

特に以下の4点についてもこの論文は評価できる。

- (1) 日本の中学校英語教育の現場での日々の実践の中から紡ぎ出した研究テーマであり、理論的考察も加えながら実践への示唆を見出そうとしている。
- (2) 類似の先行研究を幅広く概観することを通して、自らの研究の位置付けを行い、その中で筆者の研究独自性、稀少性を証明しようと研究課題、研究仮説を設定しようとしている。
- (3) 身近な教室活動「一分間チャット」を通じた指導を、実験群・統制群を作ってデータ収集・分析を行い、経験的な知識を再確認することによって、仮説を元に実証的に検証しようとする研究姿勢が見られる。
- (4) 教室での実践においても、厳密な意味での研究は倫理的にも問われるため、適切な配慮、すなわち統制群に配置された学習者も不利益を被らないという配慮が必要があるが、その点でも大きな問題はないと判断される。

以上の点を総合的に考慮して、審査委員会は宮崎太樹氏によって書かれた本論文に対して博士号を授与することが適当であると判断した。